
不良と呼ばれる者達の友情

とんすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不良と呼ばれる者達の友情

【Nコード】

N2391B

【作者名】

とんすけ

【あらすじ】

不良高校に入っている主人公。毎日ケンカにあけくれる毎日。しかし主人公はそんな中昔の友人に出会う。そんな中主人公とその友人はどう歩んで行くのか。

俺（前書き）

これは自分がふと思って書いた物語です。初めてなんでもよろしければ評価をください。

俺

おれは全国的に有名な評判のよくない学校：不良学校と呼ばれてる学校に通う高校2年だ。おれの名前は山崎京一やまざき きょういちみんなには京ちゃんなんて呼ばれてる。まあ不良達にだけど。

そんなおれの生活はいつも朝ちゃんと学校に行き、聞きもしない授業にでて友達と話すことだ。おれが学校に居ないときはだいたい他高のやつとケンカしてる時だろう。時には学校の電話がおれたちのせいで1日中鳴りやまない時もある。そういえば朝いつも歩いていると後輩達がおれの機嫌をうかがうように来る。例えば、

「おはようございます。こないだのケンカはすごかったですね！！
相手泣てましたよね」

とか、

「何か飲み物買ってきてきましょうか？」
とか。

正直ウザイ：お前らはなんだよ：なんでおれの側にくるんだよ：。なんて思う。おれは別に舍弟がほしいなんて思っていない：正直ケンカもしたくはない：おれはただ楽しく遊んで過ごしたいんだ！と思っっている。

おれは弱いものいじめが嫌いだ。この弱いものいじめこそがおれを強くしたのだ。

あれは確か中学1年の時の話：おれに親友が居たときの話だ。

アイツの名前は小林真人こばやし まことおれ達は小学校の時から仲が良かった。でも、おれはある日アイツがいじめられてるのを知った：。でも3年の先輩に助けてもらったらしい。それからアイツは変わってしまった、3年のその先輩達のパシリ的存在になっていた。ある日おれはその先輩達のもとに真人をとりかえそうと思い行った。そこには真人もいた、おれは真人に聞いた、

「お前はなんでそんな先輩達と一緒にいるんだよ！そんな扱いされ

てまで一緒にいる必要がどこにあるんだよ!!」

と、すると真人は、

「京ちゃ…お前になにが分かるんだよ!!先輩達は僕を助けてくれたんだ!これから僕を守ってくれると言ってくれたんだ!!京ちゃん…お前には関係ないだろ…」

と、先輩達は笑っていた、楽しそうに笑っていた。そんな時おれは、「笑ってんじゃねえ!真人を返せ真人はおれが守る!!」

と言いはなった。

するとやはり先輩達は怒った。そのままその時の記憶がなかった。次の日から真人は学校に来なくなった。おれは悔しくて頑張った。そして強くなった。こうしていまのおれがいるのだ。

亀裂（前書き）

いやあ早くもなにを書いていいのやら…
笑

亀裂

…ピピピピッピピピッ

「ああ今日もよくねたなぁいい朝だ」

そう言っておれは起きる。おれは毎朝小鳥の鳴き声を聞くのが好きだ。というよりおれは昔から動物が好きなんだ。

「今日も鳥達が鳴いてるや、気分がいいなぁ…これでいつもの1年2人がこなけりゃなぁ」

そう1年とは後輩のことだ。名前は慎二と健太。この2人はいつも朝あらわれる。おれはだいたい8時ころに家をでる。その途中に後輩に会うのだ。

でも今日は来なかった…さすがに来ないと少し心配だがまあ平気だろ。そう思い学校に行った。しかし教室に行くと教室には誰もいなかった…

「どうしたんだ？」

なにがあったのか分からない、いったいなにが…

今日は携帯が鳴っていない、いつもケンカに行く前には鳴るはずなのに…

ハッ！…とおれはあわてて携帯を見た。電源が切れていた。

「くそっなんでこんな時に」

そして急いで帰ろうと校門をでたときクラスのやつらがボロボロだげ元氣よく帰ってきた。

「おいお前らどうしたんだよ!？」

と聞くとクラスの一人がこういった…

「ああ京ちゃん。つかなんで携帯の電源いれてないんだよ…お前の後輩の慎二と健太が前にお前にやられたやつに捕まっておれらが助けに行っただぞ!？しかもやつら不意打ちしてきやがって。不意打ちだけじゃない人数までそれえてきやがって大変だったんだぞ? みんなに謝れよ!! でもまずこいつらに謝れよ…」

そういうと後ろから慎二と健太が出てきた。顔は青く腫れていた。それを見たおれは悔しかった：すごく悔しかった。守れなかったことが悔しかったんだ。

「慎二、健太、みんな本当にごめん」

謝った。その日はおれは学校にいられず帰ってしまった。

次の朝、おれは学校に行った。でも慎二と健太は来なかった：おれのものには：。あそこまでされるやつはこの学校ではいまだ見たことなかった。それはやはりこの学校のやつらが強い証だ。そんな中おれのせいで不意打ちをくらいボロボロになったのだからさうとう心の傷は大きいだろう。そして教室に入っても

「京ちゃんおはよう」

とかいつもの声が聞こえない。みんな少し冷めた目でおれを見る。

そして昔の真人の事を思いだしていた：

「そういえば真人今頃何してるのかなあ：」

と……

再会（前書き）

久々に書いて見ました。読んでくださってる人がいましたらこれからよろしくお願いします。

再会

あれから何日たっただろう…

最近是谁とも話してない。ケンカもないから平和と言えば平和なんだがおれは：今日もなにもなかったかの様に終わるんだろうなあ。今日はいつもよりなぜかイライラする。いまはどんな格闘技をしてるやつにも勝てるきがする。そんなことを頭に思いながら学校から帰っていた。

「今日はちつとゲーセンにでも行こうかなあ」

そういうゲーセンに向かい始めた。その途中だった：

「あれ〜？京ちゃんじゃない〜？」

と少し暗い路地裏から声が聞こえた。おれは

「？」

と思いながら向かって行った。そこには6人いた。だがそのうちの3人は顔を腫らしながら倒れている。この3人がやった証拠に拳には血がついていた。おれは

「ああ？なんようだよてめえよ？」

おれは言った。するとその中のリーダーっぽいやつが言った。

「そんなに怒らないでよ京ちゃん。おれ達親友だろ？」

と言った。

「はあ？お前誰だよ！！」

とおれは言った。するとそいつは

「あれ〜？忘れちゃった？」

おれだよおれ。真人♪だよ。いつだか京ちゃんおれのこと守ってくれるって言ったけど今度はおれが守ってあげるよ♪」

と言う。すかさず

「真人！？お前ホントに真人なのか？お前あれから学校こなくなっ
てどうしちゃったんだよ！！」

「お前になにがわかる…お前はいいよな…いじめなんて受けてなかったからおれみたいになることはなかったから…」

「真人…」

「でもいまではおれがいじめる方だけどね♪ここらへんじゃおれを知らないやつが珍しいくらい♪」

それを聞いておれは目付きが変わった。

「お前それでいいのかよ!!」

「お前になにがわかる!!そういうことは1回でもいじめられてかわいいやがれ!!」

おれはなにも言えなかったただ、

「ごめんな…」

としか。

そうしておれは家に帰った。

「真人…前みたい楽しく遊べてえよ」

仲間（前書き）

終わらそうと思ったけど真人との関係がほとんどないからまだ頑張る。笑

仲間

おれは真人と会った昨日からなぜか悔しさがあった。なんで、なんで、なんてことを頭のなかで言っていた。そんな朝だったおれはいつもどおり登校していると前の方に慎二と健太がいた。しかし当然の事ながらなにも期待せずに歩いて行こうとしたときだった。

「先輩すいませんでした！！やっぱりおれら先輩と一緒にいたいです居させてください！」

おれはなにが起こったのかわからなかった。いったいなにがあったのかわからないままこう言った。

「おお久しぶりだな。どうした誰かにやられたのか？」

と。おれはこんなことを言いたいんじゃない。それはおれも自分ではよくわかっていた。すかさず慎二と健太はこう言った。

「違いますよ！！おれ達ホントにホントに先輩とまた：」

慎二は泣きだしてしまった。

おれのほっぺたが濡れた。おれの目からも涙がでてきてしまった。

思わず慎二と健太を抱いた。

「ありがとう！お前らホントにありがとう！！」

この朝は3人で泣いてしまった。すごくいい朝だとおれは思った。そのまま3人は学校に着いた。

「おれたちなんで泣いてんだろな」

などと笑いながら学校に入って行った。だがいくら慎二と健太の二人がいい顔をしてくれても教室ではなあ：などと思っていた。おれは教室に入る、するとクラスでは二番目に強い宮本 みやもとじゅん 準が

「おお！京ちゃんおっ：おはよう」

おれはびっくりしてしまった。クラスの他のやつも準に続きおはようと言ってくる。おれは

「準……」

そういうとおれは泣いてしまった。おれは意外と涙もろいのかもし

れないと思いながら笑った。みんなびっくりした顔で大丈夫かよな
どと言ってくれた。おれは改めて仲間の大事さがわかった気がした。
「真人……」

この時までおれは知らなかった。半分はホントに仲直りしたかった、
だが半分は違う理由もあることを…

動揺

今日は朝から教室で騒いでいた。そりゃそうさ嬉しいし楽しいし。皆は正直おれの事もう許していたらしい。キツカケがないからしょうがなくだって言ってた。まあもう気にしないけど。

「よし今日はふけてどっか行くか」

とおれは言うとは

「京ちゃん元気だね、テンションたけえぞ」

なんて言う。

「楽しくてしょうがないんだからしょうがないさ」

なんていいながら教室をあとする。教室にはポカーンと先生が口を開けている。

おれ達はそのままカラオケに行ったりして遊んだ。そして楽しい時間が終わろうとした時だった。準がいきなり言った。

「京ちゃん最近うちの学校のやつがちよくちよくやられてんの知ってる？」

と言った。おれは

「ええ全然知らないそれマジ!？」

と返す。

「なんか最近名前聞くようになったんだけどなんか名前は真人っていうやつなんだ」

「真人!？」

「そう知ってる？」

「いやまあ…わかんないや」

(真人おれ達戦うのか?…)

「なんかめっちゃめっちゃいかれたやつってか危ないやつらしいよ」

「そう…なんだ…」

「京ちゃんどうかした？」

「いやいや今日はなんか腹減ったしもう帰ろうぜ」

「まあ言いたいこと言えたからいっかじゃあ解散」と準が言うともみんな帰っていった。

「じゃあね」

とみんな帰っていった。

おれは帰り道考えていた。真人とやりあう事がくるのか…どうすればいいのか…おれは真人に拳を使わないと行けないのか…と。

気持ち

真人の話を聞いてから2日たった。今のおれの気持ちはまだ話し合えばなんとかなるか思っている。おれはやっぱアイツを殴れないという気持ちがまだ上のような。そんなことを思いながらも学校に着く。

「あつ京ちゃんおはよう」

「ああおはよう準。みんなもおはよう！」

おれはこんな学校生活を送りたいだけなんだ。こういう楽しい生活がしたいだけなんだと思うと真人とも楽しく遊びたいなんて思ってしまう：そんなことは無理なのに…。

今日は1時間目は外で体育だった。けどおれはバスケがしたかった。

「バスケやりたいやつ体育館集合♪」
と言うとみんな

「ああバスケいいねバスケやろうっと」

とみんな来てしまった。外では教師がぼつんと立っている。みんな笑いながら体育館に向かった。

体育館に行く途中だった。3年のやつらがおれらにつっかかって来た。コイツらは3年では下の方だった。

「ああぼくたち3年生になんかおごってくんない？ちようどいまタバコ切らしたから買ってきて？」
と言われおれは

「なんすか？そんなくらい自分で買ってきて下さいよ先輩」

「はぁ？お前先輩の言うこと聞けねえってか？」

「別にあんたらなんて知らねえし」

「お前一度こわい思いしなきゃわかんない見たいだな！！」

「はぁ…」

ため息を着いた瞬間殴りかかってきた。その拳をかわし顔にカウンターをいれた。見事に入ったカウンターに周りのやつらは驚いた顔をしていた。殴られた3年は気を失ったのか動かない。他の3年が抱えて恐いものを見た顔をして行ってしまった。

（弱いくせにいきがんなよ…）

「やっぱ京ちゃんつえくな」クラスメートが言う。準がすかさず

「これじゃ真人ってやつも余裕じゃね？」

と笑いながら言った。周りも一緒に笑っているなかおれは苦笑いしか出来なかった。

（やっぱりアイツとはやりあいたくねえ）

「まあまあその話はまた今度！！早くバスケやろうぜ」

おれはテンションを無理矢理上げて言った。なぜか心臓がチクチクする感じがした。その後はバスケがおわりなにもない一日で終わった。

「ああこのチクチクする感じ…確か前に真人が先輩のパシリになつての見てなったなあ…一体おれはどうすればいいんだ！」

おれはこの日は寝れなかったあの日のことが頭から離れなかったから…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2391b/>

不良と呼ばれる者達の友情

2011年1月26日15時40分発行